

# 山と自然のサイエンスカフェ@信州

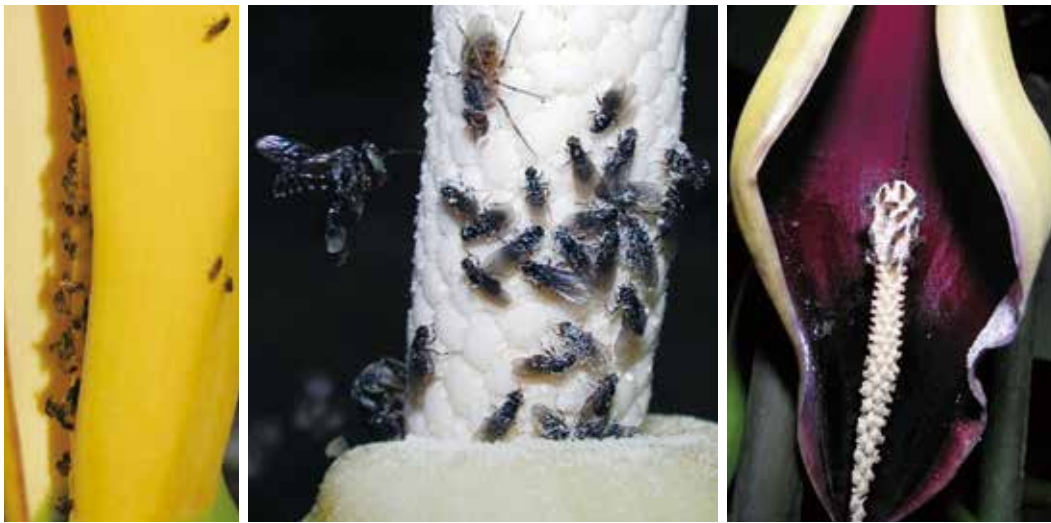
Report

本年度の第3回と第4回を行いました。ここではその内容の一端をご紹介します。

### 第3回(通算第60回) 花の上で数万年暮らし続けるとどうなるか

日時：10月18日(水) 17:30～19:00 会場：くらしふと信州 参加者：24名

動物が花粉を運ぶ代わりに、植物が蜜などの報酬を提供することを「送粉共生」といい、これは、生き物が多様化した要因の一つと考えられています。今回のテーマであるタロイモショウジョウバエの仲間とサトイモ科植物の間には緊密かつ多様な送粉共生関係が進化しています。数万年以上にわたる昆虫と植物の「送粉共生」を通じた共進化が辿り着いた色や形、匂いや行動の特殊化に魅せられた研究員（高野）が熱く語りました。



(写真左から) インドネシア・スマトラ島のサトイモ (*Colocasia esculenta*) を訪花する6種のタロイモショウジョウバエ/インドネシア・ジャワ島のクワズイモ (*Alocasia alba*) を訪花する、タロイモショウジョウバエ属の基準種 *Colocasiomyia cristata* /中国雲南省の *Stuednera colocasiifolia* を訪花する *Colocasiomyia stuednerae*

(高野 宏平/自然環境部)

### 第4回(通算第61回) 野火と縄文草原

日時：2月14日(水) 17:30～18:30 会場：県立長野図書館 3階 信州・学び創造ラボ 参加者：22名

地球上で、火は約4億年前から陸上生物の進化の歴史に関わってきたといわれます。霧ヶ峰をはじめ日本の歴史の古い草原では、縄文時代から火事が起こり続けてきたことが土壌の分析等からわかっています。実際、草原の生き物にはマルハナバチやキキョウなど野火に適応したものが多くいます。近代化以降、火が社会的に閉じ込められるようになると草原は国土の1%未満にまで減少し、歴史の古い草原は絶滅危惧種の宝庫になっています。霧ヶ峰で起こった山火事後のモニタリングなど、これまでの調査から、縄文以降の野火は食料入手のための火入れによる可能性も考えられます。

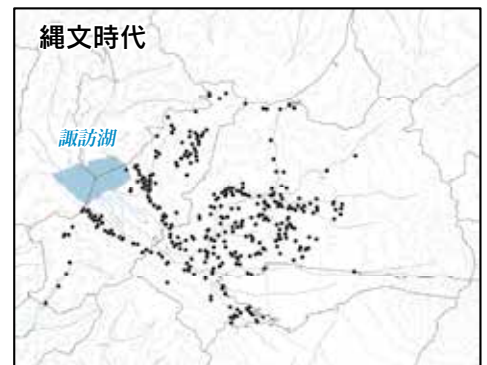
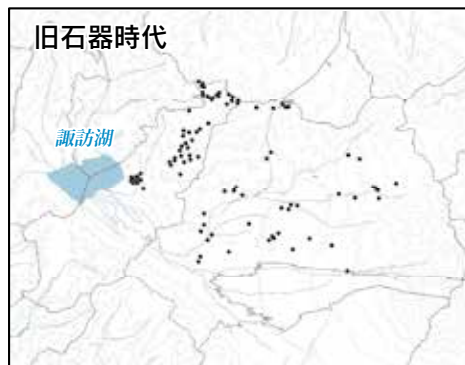


図 諏訪地域における旧石器時代と縄文時代の遺跡分布  
資料：『諏訪市遺跡分布図』『茅野市遺跡分布図』を用いて作成

霧ヶ峰の縄文草原を維持した人間活動を、諏訪地域の遺跡(図)や小字名(近世の通称地名)の分布を手がかりに考えました。その結果、旧石器時代に霧ヶ峰の草原で狩猟をしながら移動生活をしていた人々が、縄文以降森林化が進むなか火を用いて草原維持活動を始め山麓に進出し、霧ヶ峰は狩猟場として火入れが続けられ、それは近世初頭まで続いたと考えられました。

(須賀 丈・浦山 佳恵/自然環境部)